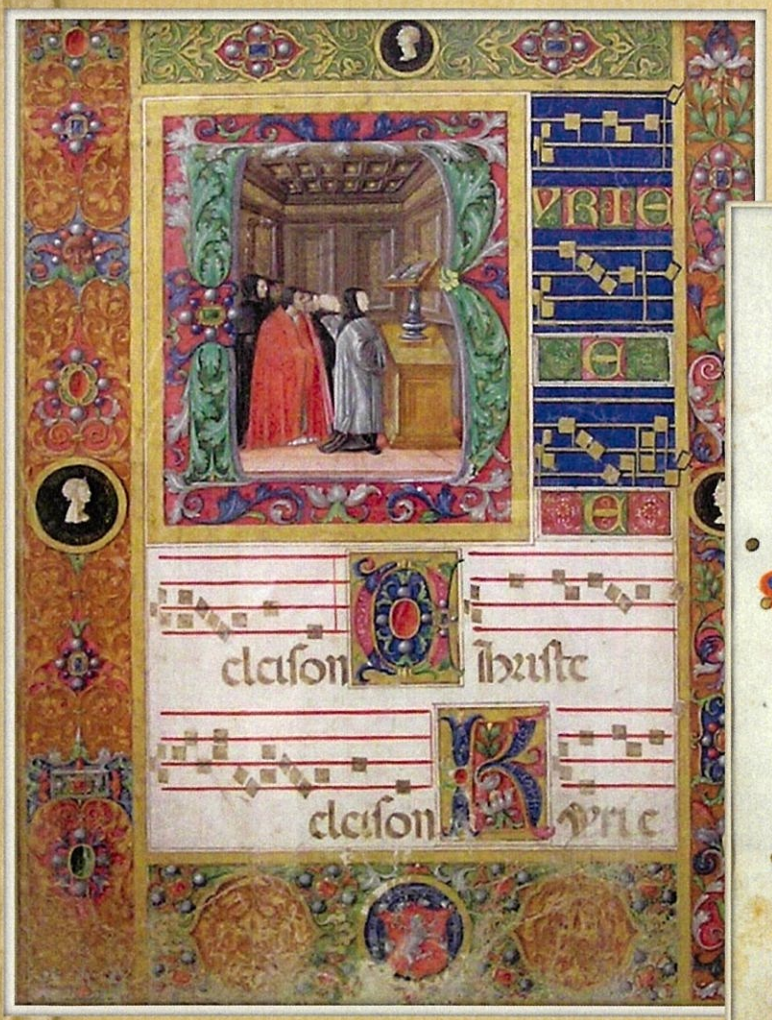
聖徳大学創立 25 周年・聖徳大学短期大学部創立 50 周年記念

The Future is yours!

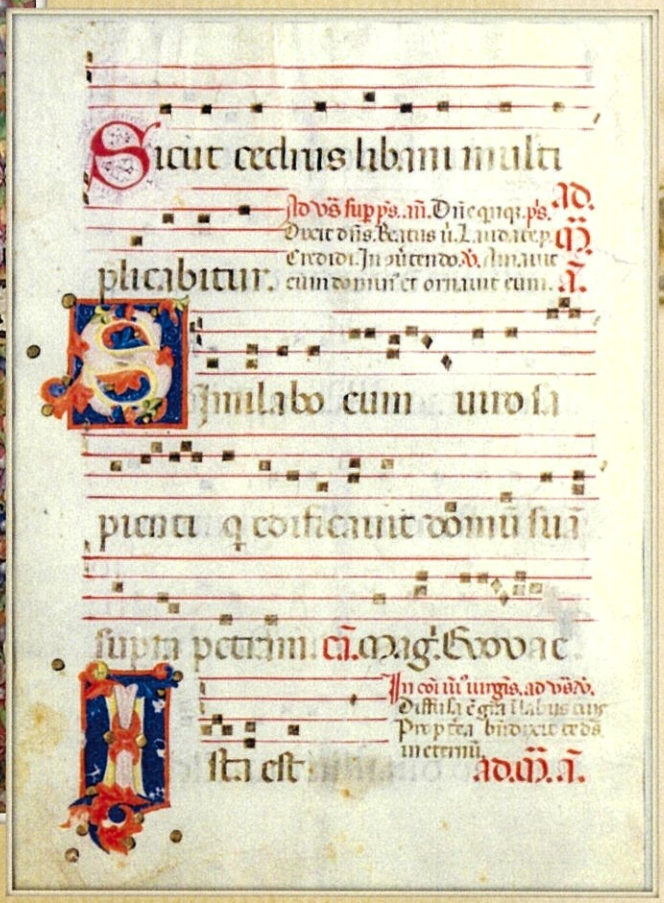
健やかに 爽やかに 清らかに
聖徳大学25周年 短大50周年

聖徳大学 収蔵名品展
「中世ヨーロッパの彩飾楽譜」



← 昇階誦 15～16世紀 スペイン

交唱歌 13～14世紀 イタリア ↓



平成27年9月14日（月）～12月19日（土）

午前 9 時～午後 5 時 （休館 毎日曜・祝日と学事日程による休業日）

聖徳大学1号館8階 聖徳博物館

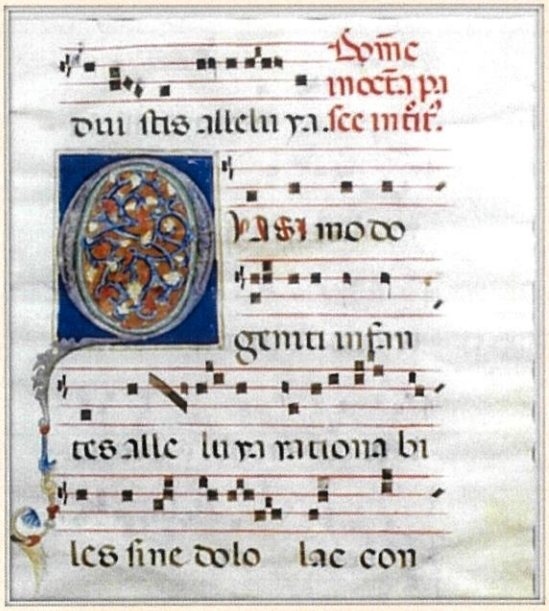
JR常磐線・JR乗り入れ地下鉄千代田線・新京成線とも松戸駅下車、
東口より徒歩5分 （学内に駐車場はありません）

中世ヨーロッパの楽譜について

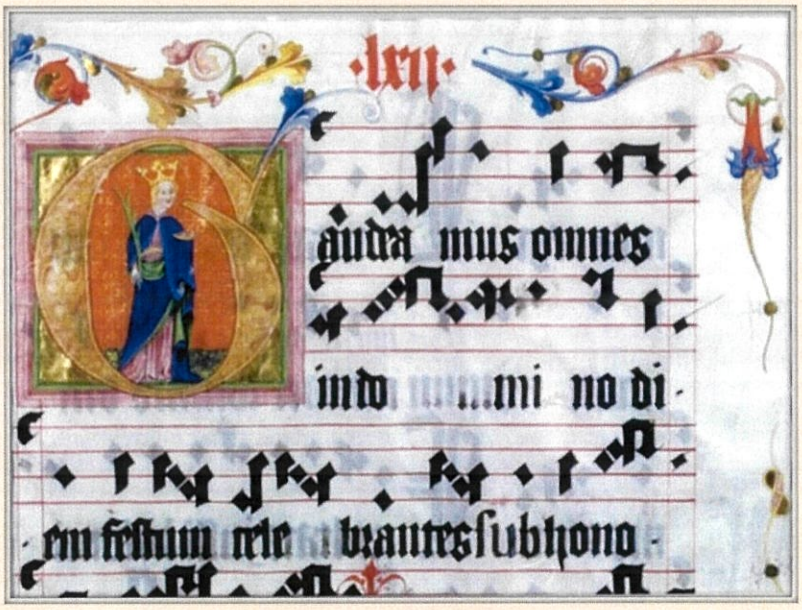
古代ギリシャ時代に登場した楽譜は、ギリシャ語の歌詞の上に音の高低を示す文字や記号を添えるという形式であった。

9世紀になると、グレゴリオ聖歌が広まり、音を正確に伝える手段として「ネウマ」と呼ばれる線状の符号が創出され、聖歌が楽譜として表されるようになった。10～11 世紀にはネウマに横線（譜線）を添えて音程を明確にする試みがなされ、更に13 世紀に入ると四角の音符ネウマと四線譜が付されて一般化した。それらは、鋲釘型ネウマを使い続けるドイツを除いて、全ヨーロッパで使用されるようになった。

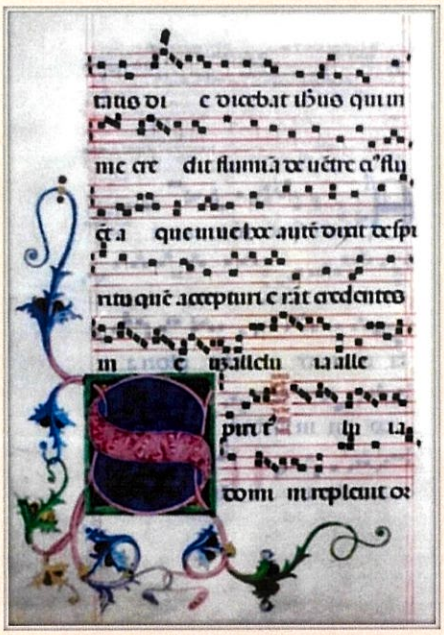
しかし、リズムを表さないネウマ譜は不便となり、13 世紀後半になると音の長短を音符の形状で表す定量記譜法が始まった。その後、15 世紀頃から用いられたピアノなどの鍵盤楽器用の記譜法が、今日の最も国際的かつ普遍的な譜法に発展していった。



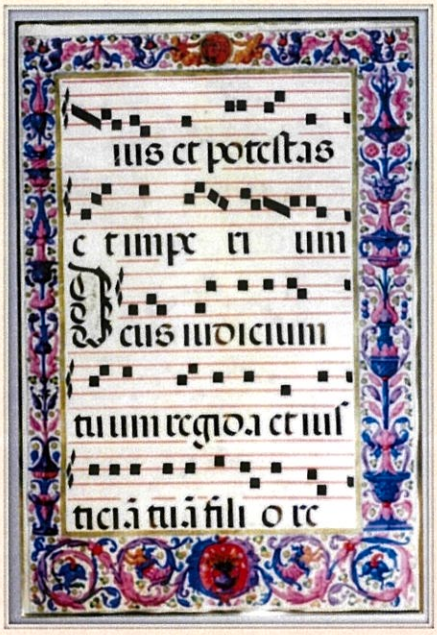
「昇階誦」 13～14 世紀　イタリア



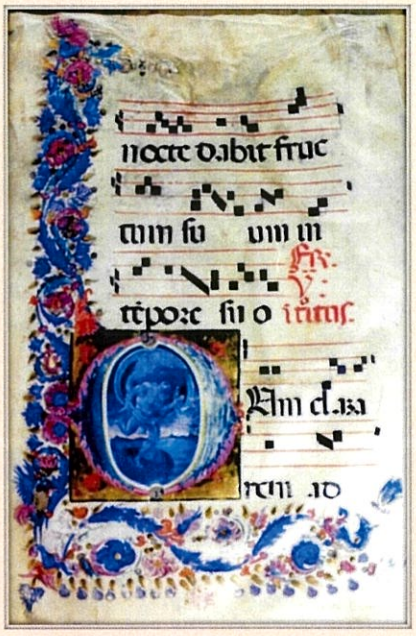
「昇階誦」 15 世紀　ドイツ



「交唱歌」 15 世紀　イタリア



「聖歌集」 16 世紀　スペイン



「昇階誦」 18 世紀　イタリア